

介護 医療 年金 ライフプラン

ゆうゆうLife



山谷の在宅型ホスピス

施設長・山本雅基さん

(寺田理恵)

東京・山谷地区の在宅型ホスピス「きぼうのいえ」は、行き場を失った人々に終の住み家を提供しています。医療施設ではなく、運営は楽ではありません。無謀といわれながらこの場所を作ったのは山本雅基施設長(山本)。突っ走るエネルギーと、NPOで働いた経験が役に立っているといいます。

下

「きぼうのいえ」は素人同然の僕が、妻が結婚前にためたお金を元手に、借金をして始めました。看護師でもある妻とは、ここを始める前、ボランティアを募るために行った大学の社会人講座「ホスピス・ボランティア」で出会いました。月給十万円でフルタイムで働いてくれる看護師は、得がたいでした。

夫夫婦の会話も、もっぱら「きぼうのいえ」や入居者のこと。以前は土、日曜もずっとここにいたけれど、僕が精神的にまいって三回倒れた後、夫、日曜は都内の実家に帰って過ごしています。三十年は続ける仕事ですから、今くらいのパースがいい。

三回目倒れて「きぼうのいえ」をやめたくなったとき、旅に出るすばらしい自然に触れました。でも、やはり人間臭い所へ帰って、人に声をかけたくなかった。そういうタイプに生まれてついちゃったんですね。子供のころ、学校の帰りに道に段ボール箱に入れられた子が捨てられているの



激増する一人暮らし 寄付頼みでは限界 自立モデル作りたい

一人暮らしの増加に対応して、在宅型ホスピスの運営モデルを作りたい。将来展望を語る山本雅基さん

は、その体験が原点。新婚の妻と山谷に引っ越して「お風呂に入りませんか」と声をかけたのが始まりです。思いは達成されたということでしょうか。ただし、僕の思い込みだけではなく、相手のニーズと合致していなければなりません。世話を拒む人には、あえて近寄らないこともありま

す。誰も彼も在宅でケアすべきとは思いません。それぞれに適切な場所があります。「きぼうのいえ」を「ホームレスのホスピス」という対象を狭めてしまっています。ここにはホームレスだけではなく、テレワークを友達に、ゴミだらけの家で暮らしていた人が倒れているのを、民生委員に見送られて運ばれてきたケースもあります。

シベリア抑留から帰って、とび職人として東京タワーの建設に携わった人。鉄道員として地道に働いた人。モダンガールとして名をはせた浅草のちようちゃんのお嬢さん。一庶民として日本を支えた人が、その後

の備えがなくて社会的入院を余儀なくされたとき、そうじゃなくて「きぼうのいえ」がある。 マザー・テレサが活動したインドと違い、日本では行き倒れの人がいても、救急車を呼ばばすむ。その後、病院から出ても行き場のない人に、僕は終の住み家を個室で提供したい。

突っ走るエネルギーに加えて、NPOの事務局で働いてマネジメントを学んだ経験が、運営面で役立ちました。「きぼうのいえ」は入居者の生活保護費に加え、一人あたり二万五千元あればやっていきますが、それは寄付金が頼りです。医療機関ではないので、医療保険のお金は入ってきません。多くの助けや協力があって成り立っています。 しかし、キリスト教関係者のバックアップや寄付があつてやっていると現状では、こうした施設は増えませんが、これから一人暮らしが増えるから、もっと汎用性のある仕組みを作りた。そのため、地域に貢献する事業を収益部門として育てようとして、自前の介護事業所を今年立ち上げました。施設ホスピスなら、医療保険から定額の診療報酬が入りますが、僕がやりたいのは、時間をかけて入居者と人間関係をつくり、次の所へ行ってもらうこと。告知されていなくても、病名が何であっても、街のど真ん中で生きていくこと。それができるのが「きぼうのいえ」です。